

報告

# オンライン育児教室の実際と学修効果 ～コロナ禍における母性看護学実習の取り組み～

富崎祥子<sup>1)</sup>・平井美緒<sup>2)</sup>・新地裕子<sup>1)</sup>・高浪良子<sup>1)</sup>・濱田維子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 純真学園大学保健医療学部看護学科, <sup>2)</sup> 糸島市役所健康づくり課

## Details and learning effects of online childcare classes for a maternal nursing practices course during the COVID-19 pandemic

Shoko TOMISAKI<sup>1)</sup>, Mio HIRAI<sup>2)</sup>, Yuko SHINCHI<sup>1)</sup>, Ryoko TAKANAMI<sup>1)</sup>, Yukiko HAMADA<sup>1)</sup>

1) Department of Radiological Science, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

2) Health Promotion Division, Itoshima City Hall

要旨：母性看護学実習の一環として、妊婦とその家族に対し学生が妊婦体験、抱っこ・授乳、おむつ交換、沐浴等の育児技術の保健指導をオンラインで実施したので、その取り組みについて報告する。また、母性看護学実習の学生の自己評価のうちオンライン育児教室に関する評価を分析し、学修効果を検討したので合わせて報告する。オンライン育児教室は、学生にとって母性看護の対象となる人々の理解や、看護技術や能力の習得に繋がっていた。また、達成感ややりがいを感じるなど実習の満足感も高く、母性看護学への関心を高めることができた。課題として、対面と比較して双方向のコミュニケーションに障壁が生じること、通信環境の影響を受けること、パソコン操作や動画撮影・編集が苦手な学生は力が発揮できなかったと感じることなどがあげられる。それらの課題改善に取り組みながら今後も継続したい。

キーワード：育児教室、オンライン、母性看護学実習、看護学生

Abstract : As part of a maternal nursing practices course, students at our college provided online health instruction to expectant mothers and their families on childcare skills, including the experience of pregnancy, holding and feeding a baby, changing diapers, and bathing. This paper reports the student activities in this practice course. It also describes the learning effects of the online childcare classes in the maternal nursing course and the analysis of the students' evaluations of the course. The training enabled nursing students to understand the situation of expectant mothers and their families, and to acquire nursing techniques and skills. Further, the students felt a sense of accomplishment and satisfaction, showing that they strongly approved of the training and that their interest in maternal nursing increased. However, several challenges arose with this training. Issues that need to be addressed include the barriers that online instructions pose to interactive communication - they differ from face-to-face instructions; the communication environment influences the progress made and students who are not familiar with computer operation or recording and editing videos may not be able to effectively demonstrate their abilities. We plan to continue this style of training while ensuring these challenges are addressed.

Key words: childcare class, online, maternal nursing training, nursing student.

## 1. 緒言

母性看護学実習（2週間2単位）は3年次後期の領域別実習の中で行われる実習である。学生は2年次で履修する母性看護学概論や母性看護学援助論、3年次前期で履修する母性看護学方法論の講義や演習を元に、産科施設での臨床実習を45時間、育児教室の企画・運営を45時間の計90時間、実施

している。（表1.2）

産科施設での実習は、周産期の対象者を中心どのような看護が実践されているかを学ぶ貴重な機会である。しかし、産褥期や新生児期を中心に実習をしていることや5日間と短期間であることが影響し、妊娠期の対象理解や支援の必要性、妊娠期からの継続看護の重要性などの理解が不十分

であった。そのため、育児教室で妊婦とその家族に接することを通して、地域における子育て支援のあり方を考え、母性看護の対象をより身近に、より広い視点で理解させている。母性看護学実習の目標（表1）のうち、特に1.3.4を達成するための実習方法である。さらに、学生が主体となり試行錯誤しながら教室の企画・運営をするという学習方法により、母性看護技術の向上や健康教育スキルの習得に繋げている。

育児教室は、地域の妊婦とその家族に開催している。企画内容は、夫の妊婦疑似体験、沐浴や授乳、おむつ交換などの育児体験、参加者同士の交流会等である。母性看護学実習では、実習で出会う妊産褥婦とその家族との関わりを通して、地域における育児支援について理解し看護を学ぶことをねらいとしている。しかし、2020年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、病院や自治体が開催する母親学級や両親学級が中止となり、本学の育児教室も対面形式での開催を中止せざるを得なかった。妊婦とその家族にとっても、専門職からアドバイスを得る機会や妊婦同士の交流の場も減っていた。松島<sup>1)</sup>の調査によると、コロナ禍以後、妊娠期・産褥期の母親の抑うつ傾向が高いことが示されている。

そこで、感染リスクを最小限にすることで妊婦とその家族が安心して参加でき、同時にコロナ禍

であっても学生の学習機会の確保ができる方法がないか模索し、Web会議システムを利用して自宅にいる参加者と大学実習室をつなぎ、育児教室を実施する体制を整えた。このような形態での実習の取り組みについての先行研究は見当たらない。今回の取り組みについて報告するとともに、学生の自己評価をもとに、オンライン育児教室に関する評価を分析し、その学修効果について検討を行ったので報告する。

## 2. 方法

### 2.1 研究デザイン

質問紙調査法

### 2.2 調査期間

2021年8月～10月

### 2.3 対象者

2020年度に母性看護学実習を履修した本学看護学科3年次生98名のうち、回答があった58名。回答率59.2%。

### 2.4 調査内容

オンライン育児教室に関する学修効果を知るために母性看護学実習の評価の一環として質問紙調査を行った。質問紙の内容は、①妊婦とその家族への理解、②母性看護技術の習得、③学習意欲と満足度、④主体的な学習姿勢、の4つを柱として構成した。また、オンラインで実施するという状

表1. 母性看護学実習の目的と目標

目的	妊婦・産婦・褥婦および新生児とその家族、さらには子育て環境を理解し、対象に応じてより健康な生活を目指した看護能力を養う。
目標	1. 妊産褥婦と新生児およびその家族を、身体的・心理的・社会的側面からとらえ、理解できる。 2. 妊産褥婦と新生児およびその家族の状況を、健康の保持増進と発達を促すwellnessの視点でアセスメントし、看護過程を展開できる。 3. ライフサイクル各期における女性の健康課題を明確にし、支援の必要性を理解できる。 4. 母子保健分野における継続看護の意義が理解できる。 5. 母子に関わる関連諸機関との連携、社会資源とその活用方法について理解できる。 6. 生命の尊厳、母性性・父性性、母性看護の意義と役割について、個人の考えを表現できる。

表2. 母性看護学実習のスケジュール例

	日程	Aグループ (5名～4名)	日程	Bグループ (5名～4名)
第1週目	1日目	＜産科施設での臨床実習＞ ・病棟オリエンテーション ・受持ち対象者の決定 ・看護過程展開	1日目	＜育児教室の企画・準備＞ ・指導案の作成 ・実演の練習 ・動画の撮影・編集
	2日目		2日目	・スライド作成
	3日目	事例検討会	3日目	・リハーサル など
	4日目	事例検討会	4日目	
	5日目	最終カンファレンス		
第2週目	6日目	＜育児教室の企画・準備＞ ・指導案の作成 ・実演の練習 ・動画の撮影・編集	5日目	＜産科施設での臨床実習＞ ・病棟オリエンテーション ・受持ち対象者の決定 ・看護過程展開
	7日目	・スライド作成	6日目	
	8日目	・リハーサル など	7日目	事例検討会
	9日目		8日目	事例検討会
			9日目	最終カンファレンス
	10日目	育児教室の開催・評価	10日目	育児教室の開催・評価

況が学生にとってどのような達成感や負担感をもたらしたかを明らかにするために、オンラインで実施したことで良かった点・力が発揮できた点/難しかった点・力が発揮できなかった点について調査した。そして、妊婦とその家族との関わりを持ち母性看護の対象となる人々への理解を深めたことが、学生自身の結婚や妊娠、育児に関する価値観に影響があったかを明らかにするための調査も行った。

①妊婦とその家族への理解を問う項目は、「親役割の獲得（出産・育児に興味・関心を持つ、良好な家族関係を築くなど）」、「妊婦の社会的変化（就労状況や交通手段などの変化）」、「妊婦の身体的変化（体形、体の重心や姿勢、自覚症状、日常生活動作などの変化）」、「妊娠に対するネガティブな感情（妊娠したことへの不安や迷い、心配などの感情）」、「妊娠に対するポジティブな感情（妊娠したことへの希望や期待、願い、楽しみ、

喜びなどの感情）」、「対児感情（胎児に対して抱く感情のこと、可愛い、いとおしい、神々しい、弱いなど）」の10項目、②母性看護技術の習得を問う項目は、「沐浴」、「抱っこ・授乳」、「おむつ交換」、「母性看護技術の課題が明確になった」の4項目、③学習意欲と満足度を問う項目は、「満足感を感じた」、「母性看護学に対する関心が高まった」、「今回、育児教室を実施して、やりがいを感じた」、「育児教室は地域の社会貢献に役立ったと感じた」の4項目、④主体的な学習姿勢を問う項目は、「目標に向けて計画的に取り組んだ」、「責任感をもって最後までやり遂げた」、「他のメンバーと協力できた」、「主体的に取り組めた」の4項目、結婚や妊娠、育児観への影響については「自身の結婚や妊娠、育児観に影響があった」の1項目、合計23項目とした。各設問は、5件法（とてもできた、ややできた、どちらでもない、あまりできなかった、まったくできなかった）での回

答とその理由を自由記述で記載する自己評価とした。また、オンラインで実施したことで良かった点・力が発揮できた点/難しかった点・力が発揮できなかった点について、それぞれ自由記述で記載してもらった。

## 2.5 分析方法

択一式の質問項目については単純集計を行った。また、自由記述についてはその一部を抜粋した。

## 2.6 オンライン育児教室の実際

オンライン育児教室は2020年10月末から2021年3月初旬の間に計5回開催した。家族の参加も促すため毎回土日を設定した。参加者の募集は大学ホームページとフリーペーパーや市政だよりへの掲載、実習施設等へのチラシの配布・掲示により行った。

学生は、妊婦体験・妊婦体操、抱っこ・授乳、おむつ交換、沐浴の各テーマをグループに分かれて担当し、1つのグループが15～30分の内容を担当した。4日間かけて、指導案の作成、実演の練習、動画の撮影や編集、スライドの作成などに取り組み、繰り返しリハーサルを行った。説明の内容については母性看護学領域の教員から助言を受けるが、形式や方法、使用する媒体などについては学生間で検討しながら作り上げていった。また、リハーサルでは教員が参加者役となり、やり取りの実際をイメージして練習ができるように配慮した。

本番当日は、Microsoft Teams を用いて本学 MLC5F 実習室と参加者の自宅等を WEB 会議システムで繋いで実施した。1回の開催時間は90分とし、担当する学生は20名前後、参加者は2～4組であった。(表3)

オンライン育児教室はプログラムに沿って進行的した。(表4)各テーマに沿って、動画やスライド、実演など様々な方法を組み合わせて説明を行った。対面式の育児教室では、夫を対象に妊婦体験ジャケットを使用した体験を設定していたが、オンラインでは、自宅にあるものを代用して妊婦体験ができるよう、参加者には事前に2Lの水入りのペットボトルを2、3本入れたリュックサックを準備してもらい、前に抱えてもらう体験型の方法を試みた。学生は、夫や家族が体験の中で妊婦の身体的変化や大変さを理解できるように、日常生活動作

や家事動作を交えて説明しながら一緒に行った。妊婦体験の後に妊婦体操も取り入れるなど、妊婦とその家族が一緒に楽しみながら体験できる内容とした。(図1.2)抱っこや授乳方法、おむつ交換の説明では、新生児モデル人形の代用として、参加者に事前に大きめのぬいぐるみやバスタオルをロール状に丸めたものを準備してもらい、それを赤ちゃんに見立てて学生の説明に合わせて育児技術の練習をしてもらった。授乳クッションの利用や排気の方法など、授乳に関連する事柄についても説明した。おむつ交換や沐浴については、実演と動画を組み合わせて説明した。授乳・抱っこで使用したぬいぐるみやロール状のバスタオルを用いて、参加者と一緒に手順を確認しながら実施した。(図3)最後に質疑応答や交流会の時間を設け、参加者同士や参加者と学生が交流する機会を設けた。(図4)

司会進行、カメラやパソコン等の機器の操作、タイムキーパー、司会者への指示出しなどはすべて学生が担当した。参加者からの質問や相談については助産師の臨床経験を持つ教員が対応した。途中で音声や映像等が途切れるなど通信トラブルが発生した場合に備え、教室の様子を YouTube でライブ配信した。教室終了後、録画した育児教室の動画が視聴できる URL を参加者にメールで送信し、繰り返し視聴できるようにした。なお、参加者の募集やオンライン配信などに関して、本学の入試広報係やシステムエンジニアの支援を受けて開催した。

## 2.7 倫理的配慮

調査は母性看護学実習の評価後に WEB 上で実施した。調査の際には、研究内容・目的・意義・倫理的配慮等を紙面と口頭で説明し、調査への協力は自由意志であり協力しないことで不利益を被ることはないこと、データは研究目的以外で使用しないこと、個人が特定できない設定をして WEB 調査をすることを保証した上で調査協力を依頼した。回答の送信を持って同意とした。また、写真撮影時に報告書等に掲載する可能性と、それを望まない学生については掲載しないことを説明し、同意を得た。

なお、本研究は純真学園大学倫理審査委員会の承認を受けている。(承認番号22-04)



表3. 参加者と担当学生数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
参加者（組）	4組	2組	2組	2組	3組
担当学生数	20名	19名	19名	21名	19名

表4. オンライン育児教室のプログラムの1例

1. はじめに
2. 妊婦体験
3. 授乳・抱っこ
4. 休憩
5. おむつ交換
6. 沐浴
7. 質疑応答・交流会
8. まとめ



図1. 妊婦体験の様子



図2. 妊婦体験の様子



図3. 抱っこ・授乳の様子



図4. 質疑応答・交流会の様子

### 3. 結果

以下、質問項目を“ ”，選択肢を「 」，自由記述内容を＜ ＞で記述する。

#### 3.1 対象理解

妊婦とその家族の理解を問う項目は，“親役割の獲得”，“妊婦の社会的変化”，“妊婦の身体的

変化”，“妊娠に対するネガティブな感情”，“妊娠に対するポジティブな感情”，“対児感情”の6項目すべてにおいて80%以上の学生が，“とてもできた”“ややできた”と回答していた。（図5.6）

“妊婦とその家族の理解が深まった体験や場面”として，以下の回答があった。＜具体的な育児用

品についての質問が多く、妊婦の方々の関心が高いということがわかった＞など、参加者の関心が高い事柄について具体的に理解することができていた。また、＜妊婦さんがいつ頃まで運転して良いのかと質問されたことから、普段の生活との変化を受けとめ、赤ちゃんのために自分がどうすべきかという思考や行動になっていると感じた＞など、参加者の親役割の獲得について感じ取ることができていた。＜新型コロナウイルスのワクチン接種についての話題がでた時、今ならではの妊婦さんの不安を知ることができた。＞と回答しており、実際の思いに触れることでコロナ禍での妊娠・出産を迎える対象者について理解を深めていた。また、＜夫婦2人とも笑顔で育児体験をしている様子を見て、喜びや楽しさを感じていると理解できた場面＞や＜積極的に参加している父親を見て、意欲を感じた＞など、参加者の表情や姿勢、様子から、妊婦だけでなくその家族についても理解を深めていた。（表5）

### 3.2 母性看護学の技術習得

母性看護学の看護技術習得に関しては、“沐浴”，“抱っこ授乳”，“オムツ交換”において80%以上の学生が「とてもできた」「ややできた」と回答していた。（図7）また、自分の母性看護技術の課題が「とても明確になった」「やや明確になった」と答えた学生は93%であった。（図8）“母性看護技術の課題が明確になったと感じた体験や場面”として＜母性看護の知識や技術不足を感じたとき＞＜妊産婦のニーズを把握する必要があると感じたとき＞＜上手く伝わったか不安なとき＞と回答していた。（表6）

### 3.3 母性看護学に対する学習意欲と満足度

“満足を感じた”，“母性看護学に対する関心が高まった”，“やりがいを感じた”，“社会貢献に役立った”という問いに対して90%以上の学生が「とても感じた」「やや感じた」と回答していた。（図9）

満足度の理由では、＜参加者の方に喜んでもら

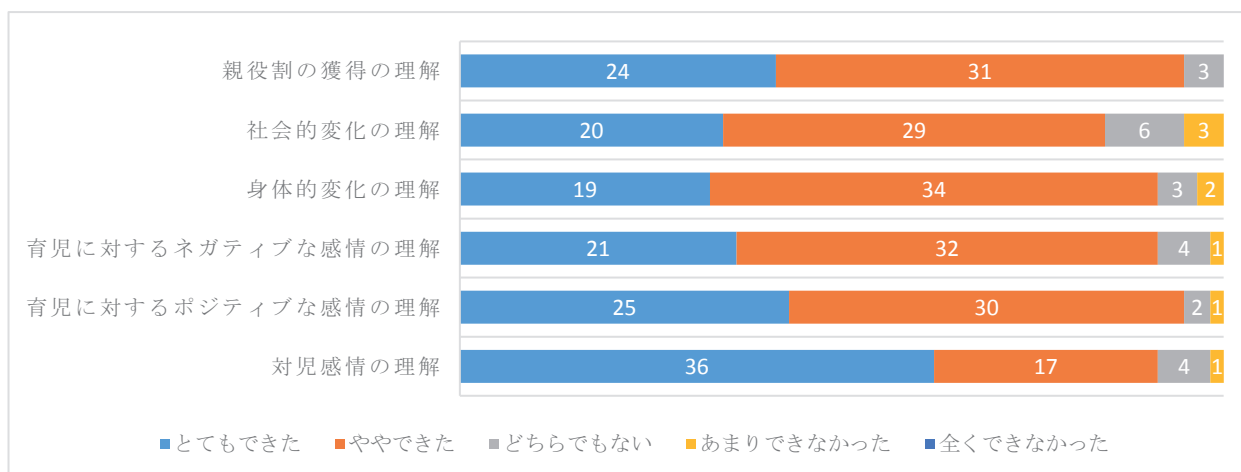


図5. 妊婦の理解 (n=58)

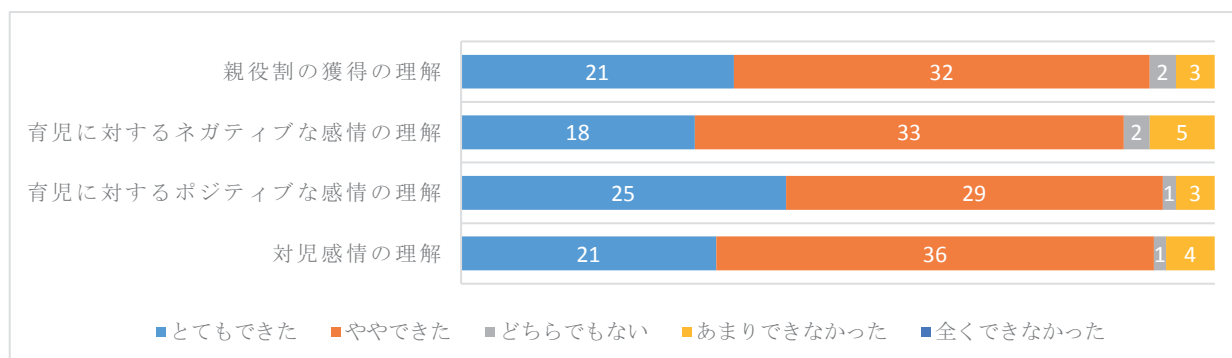


図6. 家族の理解 (n=58)

表5. 妊婦とその家族の理解が深まった体験や場面

学生の自由記述より一部抜粋	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な育児用品についての質問が多く、妊婦の方々の関心が高いということがわかった。</li> <li>・妊婦さんからの質問で、日常生活できつい点など具体的な問題を知った。</li> <li>・妊婦さんがいつ頃まで運転して良いのかと質問されたことから、普段の生活との変化を受けとめ、赤ちゃんのために自分がどうすべきかという思考や行動になっていると感じた。</li> <li>・出産に向けて準備をしたり、育児に対して考えたりする様子から妊娠中から親になるという準備をしているとわかった。</li> <li>・新型コロナウイルスのワクチン接種についての話題がでた時、今ならではの妊婦さんの不安を知ることができた。</li> <li>・夫婦2人とも笑顔で育児体験をしている様子を見て、喜びや楽しさを感じていると理解できた場面。</li> <li>・パパとママが話し合っている様子から、本当に子供のことを考えているのだと伝わってきた。</li> <li>・夫婦で参加しており、パパからママを気遣う言葉も聞かれたため。</li> <li>・積極的に参加している父親を見て、意欲を感じた。</li> <li>・一緒に参加している父親も悩みをもっていることがわかった。</li> </ul>	

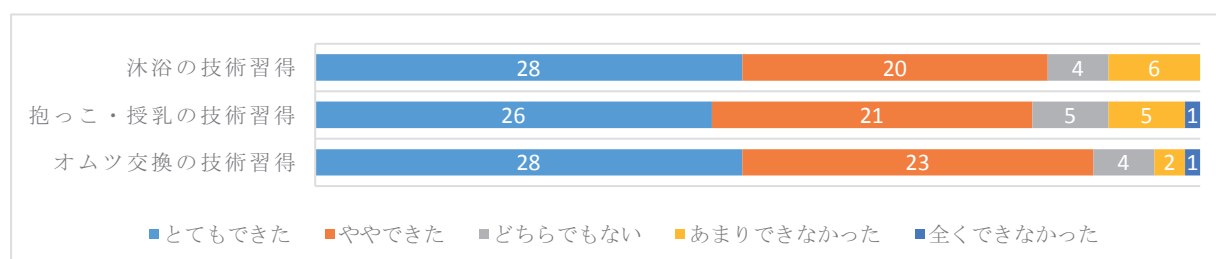


図7. 母性看護学の看護技術習得状況 (n=58)

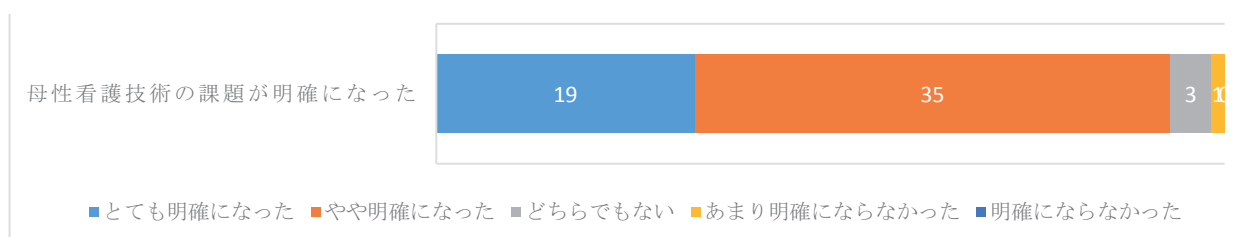


図8. 母性看護技術の課題が明確になったか (n=58)

表6. 母性看護技術の課題が明確になったと感じた体験や場面

学生の自由記述より一部抜粋	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に教えるためには自分が理解していないと出来ないと感じた。説明するときに自信がなかったのもっと学習が必要だなと感じた。</li> <li>・人に説明できるようになるまで、理由まで理解しておく必要があると感じた。</li> <li>・動画を撮影している時に何の知識が足りてないかを再確認できた</li> <li>・妊婦はより詳しい情報提供を求めている。もっと幅広く、専門的な知識を身につける必要があると実感した</li> <li>・対象者がどのようなニーズを抱いているのかを適切に把握し、助言・指導できる必要がある。</li> </ul>	

えた・役に立てた><自分たちが主体となり取り組んだので充実感や達成感があった><オンラインでも問題なく行えた><妊婦さんや家族の方と交流ができた><自己の学びや経験につながった>と述べられていた。一方で<対面でやりたかった><実際に妊婦さんと交流したかった><教員の指導に差があった>などの回答もあった。(表7)

### 3.4 オンライン育児教室に対する取り組みの姿勢

教室に対する取り組みの姿勢についての項目では、“目標に向けて計画的に取り組んだ”、“責任感を持って最期までやり遂げた”、“他のメンバー

と協力できた”、“主体的に取り組めた”に関して、90%以上の学生が「とてもできた」「ややできた」回答した。(図10)

### 3.5 育児教室をオンラインで実施したことで良かった点・力が発揮できた点/難しかった点・力が発揮できなかった点

“育児教室をオンラインで実施したことで自分にとって良かった点や自分の力が発揮できた点”について<事前に動画を作成したことで、本番当日に緊張したりミスしたりすることなく、スムーズに行えた><パソコン操作や動画撮影・編集などの特技が発揮できた>などの回答があった。

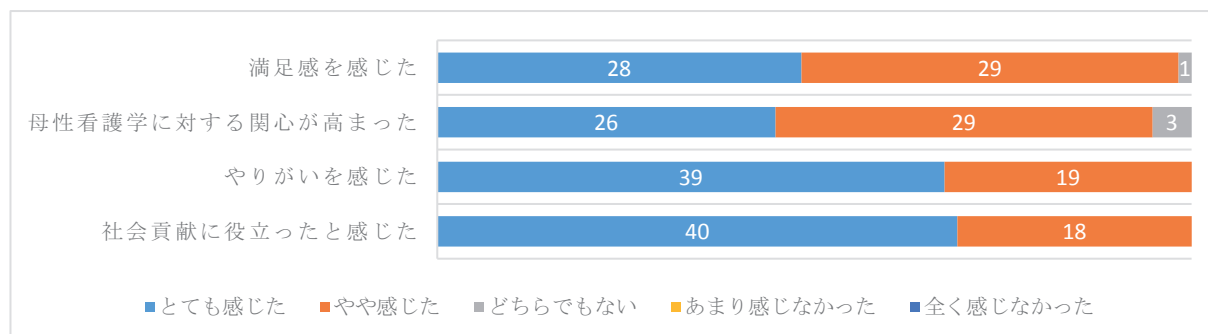


図9. 母性看護学に対する学習意欲と満足度 (n=58)

表7 満足度の理由

学生自由記述より一部抜粋
<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者からも参加してよかったと言ってもらい、グループで一団となって行えたから。</li> <li>・微力ながらも育児に不安を抱えている初産婦の方の役に立てたことが嬉しかった。また、自分自身の知識の獲得にも繋がった。</li> <li>・リモートでもきちんと準備をすれば伝えたい事はまとまると実感できたし、参加していただいたお母さんお父さん達からも好評だったから。</li> <li>・オンラインではあったけど、実際に赤ちゃんが生まれる方々に関わることができて、自分が勉強していることが少しでも役に立ったと感じたから。</li> <li>・妊婦さんたちと交流でき、達成感を味わえたこと。</li> <li>・自分から地域に貢献する機会が少なかったが、地域に貢献できたというやりがいを感じたから。</li> <li>・動画を作るのが楽しかったし、どうしたら上手く伝わるのかやポイントなども考えながら作ることができ、母性看護技術の勉強もできたため。</li> <li>・自分達で一から作り上げる充実感と達成感があったから。</li> <li>・対面で指導ができず残念だった</li> <li>・実際に妊婦さんと交流したかった。</li> <li>・先生方の指導に差があった。</li> </ul>



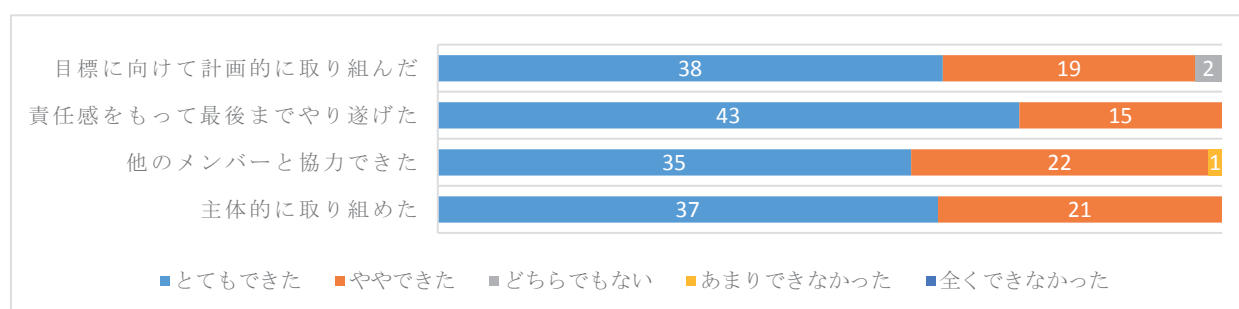


図10 オンライン育児教室に対する取り組みの姿勢 (n=58)



図11 結婚や妊娠、育児観への影響 (n=58)

一方、“育児教室をオンラインで実施したことで自分にとって難しかった点や自分の力が発揮できなかった点”については＜一方的に教える形になった＞＜参加者の反応や雰囲気はわかりにくかった＞＜参加者に伝わっているか不安だった＞＜パソコン操作が苦手で、動画撮影・編集などの経験もなかったので難しかった＞＜通信環境の問題等でスムーズに行えなかった＞などと回答していた。

### 3.6 結婚や妊娠、育児観への影響

“オンライン育児教室に参加したことで自身の結婚や妊娠、育児観に影響があった”について「とてもあった」「ややあった」と答えた学生は83%であった。(図11)

## 4. 考察

### 4.1 オンライン育児教室を実施した学生の学修効果

対面ではなく、対象者とオンラインで関わる体験によっても、学生は対象のニーズを想定し、妊婦とその家族の生活を想定しながら妊婦体験や抱っこ、授乳などの指導方法を検討することを通して、母性看護の対象となる人々への理解を深めていた。オンラインであっても妊婦や家族の様子をリアルタイムに見て関わることで対象理解につながっていた。参加者から様々な質問や相談をし

てもらったことで、妊婦とその家族の関心が高い事柄や、親役割の獲得、コロナ禍での妊娠・出産を迎える対象者の思いについて理解を深めていた。また、自宅から参加してくださっている参加者の表情や姿勢、様子から、妊婦だけでなくその家族の日常の様子や関係性、楽しみや喜び、意欲などの心理面の特徴についても理解を深めていた。

動画撮影や実演の練習では、よりわかりやすい説明をするために試行錯誤しながら何度も手技を繰り返すため、自然と技術習得に繋がっていた。また、母性看護技術の課題が明確になったと感じた体験や場面として＜母性看護の知識や技術不足を感じたとき＞＜妊産婦のニーズを把握する必要があると感じたとき＞＜上手く伝わったか不安なとき＞などと回答していた。今回の経験を通して、自分自身の具体的な課題を前向きに受け止め、対象理解をすることの重要性について学びを深めることができた。オンライン育児教室を実施した学生の満足度は高く、やりがいを感じ、社会貢献について考えることができたと回答した学生が多かった。オンラインであっても、主体的な企画・運営と、参加者からの肯定的な評価や反応が学生の達成感ややりがいに繋がったと思われる。山田<sup>2)</sup>が学生の意欲を高める関わりとして学生の意思の尊重が重要であると述べているように、学生が試行錯誤をして考えたことを尊重することは指導方法として有効であったと言える。また、オンライ

ンであっても参加者と触れ合うことで、妊婦とその家族をリアルに感じることに繋がり、母性看護の対象となる人々への理解にとどまらず、学生自身の結婚や妊娠、育児観にも影響があったと考える。

また、対面形式では緊張してしまう学生もオンライン形式にしたことで落ち着いて参加することができた。学生たちにとってなじみの深いデジタル機器を用いて動画を撮影・編集することを通して、自分の得意なことや能力を発揮できたと考える。グループメンバーと協力して、よりわかりやすく伝えるために内容や方法を試行錯誤することが達成感に繋がったと考える。

#### 4.2 母性看護学実習におけるオンライン育児教室の意義と課題

コロナ禍では感染拡大防止のために学内実習に変更するなどの対応が必要となったため、母性看護の対象となる人々に接する機会が減少し、学生の学びに影響を与えた可能性がある。2020年に実施された看護系大学247校における臨地実習調査によると<sup>3)</sup>、母性看護学実習で困難となった到達目標について、母親学級の未開催、分娩期実習の中止などにより、母子関係、親子関係への援助の実施不足が課題として挙がっている。また、中村ら<sup>4)</sup>も、学内実習では妊娠経過や分娩、ウェルネス志向の内容が少なくなるため、病院実習における実践に及ばない限界があると述べている。そのような状況下で、オンラインではあるが妊婦とその家族との関わりを持てたことで対象理解に繋がるなどの大きな意義があった。一方、対面式と比較して説明が一方的になる傾向があること、参加者の反応がわかりにくいこと、通信環境の影響を受けることはオンライン形式の課題と限界であるといえる。また、パソコン操作や、動画撮影・編集などの能力や経験の個人差が、実習の達成感に影響する可能性がある。グループメンバーの中に得意な学生がいない場合は教員がフォローしたり、動画以外の媒体を使つての説明を促すなどの配慮が必要である。これらの課題改善に取り組みながら今後も継続したいと考える。なお、今回、回収率が59.2%であったことは、アンケートの実施時期が遅かったこと、回答方法がWEBのみであったことなどが要因として考えられる。学修効果を

裏付けるには、引き続き、十分なデータを収集し分析する必要がある。

#### 4.3 妊婦とその家族におけるオンライン育児教室の意義

オンラインで運営することにより、感染リスクがない状態で安心して気軽に参加できたこと、動画等でイメージができたこと、アーカイブ配信期間中は繰り返し視聴できたことで、教室に参加した妊婦とその家族からの高い評価を獲得していた。コロナ禍において、医療機関や自治体が主催する母親学級や両親学級への参加が難しい状況の中で、妊婦とその家族にとって有用な育児教室を提供できたと考える。高橋ら<sup>5)</sup>が産後1か月の母親を対象に行った調査で、半数以上の人が妊娠中に詳しく学習・相談しておきたかったと回答していた項目は「赤ちゃんのお世話」などであったことから、コロナ禍においても、オンラインで妊娠中に育児のイメージを持つことができるような育児教室を工夫し続けていることは、産後の育児不安の予防にもつながる重要な活動だと考える。

### 5. 結語

2020年10月から2021年3月までにオンライン育児教室を実施し、妊婦とその家族に対し学生が妊婦体験、抱っこ・授乳、おむつ交換、沐浴等の育児技術の保健指導を実施した。オンライン育児教室は、学生にとって母性看護の対象となる人々の理解や、看護技術や能力の習得に繋がっていた。また、達成感ややりがいを感じるなど実習の満足感も高く、母性看護学への関心を高めることができた。課題として、対面と比較して双方向のコミュニケーションに障壁が生じること、通信環境の影響を受けること、パソコン操作や動画撮影・編集が苦手な学生は力が発揮できなかったと感じることなどがあげられる。これらの課題改善に取り組みながら今後も継続したい。

### 【引用文献】

- 1) 松島みどり, 調査から見えてきた産後の抑うつリスク 妊娠期・産褥期の母親の精神的健康状態に関する調査から, 助産雑誌 75 (4), 242-249, 2021
- 2) 山田知子他, 看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり, 生命健康科学研究

所紀要 17, 13-23, 2010

- 3) 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会,  
2020年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 8-9,  
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf> (Accessed 2022/12/20)
- 4) 中村朋子他, コロナ禍における母性看護学の地域母子支援施設とシミュレーション実習の効果と課題  
テキストマイニングを用いた実習のまとめの内容分析から, 兵庫大学論集 27-28, 127-135, 2022
- 5) 高橋佳子他, A 県妊産婦の産前産後ケアのニーズ調査 (第2報) - 初産婦と経産婦の比較から -, 青森中央学院大学研究紀要 29, 11-19, 2018